

## 小出裕章さん「最終講義」

2011年4月号のジャーナリスト・マスコミ評に「3・11の衝撃」を寄稿した（拙著『災後の新聞』70～71ページ）。そのさいごに特報「危険性40年訴え小出裕章・京大助教に聞く」（中日新聞2011年4月13日）は、原発事故の現状や推進の背景を知るうえで示唆に富むと書いた。事故から1ヵ月ほどに読んだ小出先生の指摘に心が動いた。

写真は毎日新聞3月6日夕刊の特集ワイド「続報真相」、京大原子炉実験所助教・小出裕章先生の「最終講義」を伝えている。北海道から九州まで、小出先生の退職を知った約140人が京大原子炉実験所に詰めかけ、部屋から人が溢れたため別室にモニター中継したという。小出先生らしい名講義を聴こう。



「事故の収束なんてとんでもない。肝心の現場が見えず、溶け落ちた核燃料などの炉心は、いまだにどこにどのような状態で存在するのか分からない。人が近づくと即死するほどの放射能があるからです。こんなに過酷な事故は、発電所では、原発でしか起こらない。4年たっても原子炉の現場に立ち入ることができないのです。」

「政府が避難指示している地域は、到底人が住めない地域です。琵琶湖の面積の1.5倍に当たる約1000平方キロが無地帯帯なのです。避難するという事は根こそぎ生活を奪われ、流浪化することであり、いまも10万人もの人が帰れないでいる。」

「避難指示区域よりもはるかに広い東北や関東の一部地域が、放射線管理区域の基準以上の汚染レベルになった。これは、日本政府が示した事実であり、風評でも何でも無い。そこに人々が普通に暮らしている。それなのに誰も処罰されず、責任を取ろうとしない」最も強調したのは「この広大な土地に子どもたちが生きている」ことだった。「残念ながら私には時間を戻す力はない。こんな事態を許してしまった私たち大人はどんなことをすべきか」と問い、被ばくから子どもたちを守りたいと述べる。

講義の最後、「間違った人生だったが、それでも恵まれた人生だった」と振り返った。「間違った」というのは「原子力開発に夢を抱き、命をかけるため」に歩んだことだ。だが「自分の愚かさに落とし前をつけるため」と、原子炉実験所という原子力の専門の場に残った。「原子力の廃絶を目指したが、原子力を進める組織はあまりに巨大で、私は敗北を続け、ついに福島事故が起きてしまった」。落とし前は「つけられなかった」と考えている。「福島事故を契機に原子力廃絶に向かうならばまだしも、福島のことまらでなかったかのように、原発を進めてきた人は責任を取らず、この国は原発の再稼働、新設、輸出へと動いている」からだ。

(2015年3月13日)